
幻夢抄録 目覚め 7章

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢抄録 目覚め 7章

【Nコード】

N0879A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

氷魚と瑪瑙の前に、突如、現れた敵。彼女は、氷魚の、本当の母親を知っていて…！？

追っ手（前書き）

ご無沙汰しております、どうも、維月です。
今回はやばい、です。氷魚ピンチ！
独特の世界観を、楽しんで読んでみてください。

追っ手

氷魚が、村に来てから、七日が過ぎた。

村人との折り合いもよく、子供たちとも、すぐに仲良くなった。今、彼女は出かけていて、いない。

村の女たちと一緒に、楊梅の収穫をするといった。しかし、そんなに時間のかかる、作業ではないはずだ。もうすでに、日が傾きかけている。

痺れを切らした瑪瑙が、腰を浮かせたとき、畑の脇を、大きな籠を抱えた氷魚が走ってきた。

「おい、瑪瑙　！」

息を切らして、氷魚は籠をおろす。

「ごめんね、遅くなっちゃって。見てっ、こんなにたくさん貰っちゃった」

「ったく、心配かけンじゃねえよ……」

ため息をついて、瑪瑙は、氷魚の髪をくしゃくしゃとかき混ぜた。

「うん、ごめん……」

屋根にとまっていた鴉の、漆黒の瞳が、氷魚だけを、じっと、見つめていた。

音をたてずに、屋根から羽ばたき、二人の上空を旋回すると、軽やかにとび去っていった。

鴉は、遙か彼方まで広がる、平野を見渡してから、瞬き、そして墜ちた。

次に目を開くと、そこは、豪奢な装飾が施された部屋だった。

「『あれ』の娘が戻ったのは、間違いないようね……まだ、完全に目覚めてはいないようだけど」

「奥方さま、いかがなさいました？」

扉の外で、臣下が訊く。

「いいえ、なんでもないわ。古い知人に、置きみやげをしてきただけ……」

「では、ついに……見つかったのですね？」

「ええ……ようやくね、フッフ……あの小娘、真実を知ったら、どんな顔をするのかしら」

謎の女は、扇を片手にあおぎ、口もとに、ニヤリと嫌な笑みを浮かべた。

「あら？」

氷魚は、か細い鳴き声を聞いて、外に出た。

「おい、なんだよ急に……」

ことの最中に、外に出た氷魚に悪態をつく瑪瑙。

「子猫だわ……降りられないみたい」

氷魚が、指さした場所には、茶色い毛玉のような物がいた。

「猫なんだから、ほつといても降りられる」

「でも、かわいそうじゃない！あたし、行ってくるっ」

「お、おいっ、氷魚！」

氷魚は、木に登り始める。

「待ってね、もう少しで届くから……」

伸ばそうとした、その手を、子猫はひつかいた。

「痛っ！怖がらなくてもいいよ、おいで」

「バカな娘よ、わざわざ殺されに、登ってくるなんてね」

爪についた血を舐めてから、猫は、鼻で嗤った。

嗤った声は、少女の声だった。

「え……っ」

「見れば、見るほど似てるよ……お前の母親にねえ」

そう言つて、猫は、急に飛び退いた。

するり、と瑪瑙の斬撃をよける。

「だから言つたろうがっ！猫に、ロクな奴あいないってっ」

「瑪瑙……」

「お前は下に降りてろっ、てめえ、コラ！氷魚に傷つけやがってっ、切り刻んで、畑の肥やしにしてやろうか！」

「ふん！ご免だね、今日のは、ちよっとした挨拶代わりさっ、まったく『あの方』もお優しいこったよ、じゃあなっ！」

飴のように、空間を歪ませて、猫は消えた。

「チッ！逃げ足の早い…氷魚、大丈夫か！？」

「う、うん…」

「傷見せろ、膿むといけないから」

「…ごめん、なさい」

「あ？いいよ、謝るなっ…どした？氷魚」

氷魚は、腕を押さえて、俯いていた。

「どうした、傷が痛むのか？」

氷魚は、かぶりを振った。

「あの猫、あたしの母さんを、知ってたみたいだった。あたし、なんにも知らない。兄さんが死んだのも、聞かされるまで、知らなかった…自分の家族のことさえ知らないなんて、なんか…情けない」

「仕方ないことだってある、気にするんじゃないよ」

「ねえ、瑪瑙は…あたしの母さんを知ってる？知ってたら、教えて欲しいの」

「…中に入ろっ、冷えてきた」

「うん」

真実（前書き）

母親に会いたがる氷魚。しかし、彼女の前に、冷たい真実の壁が立ち
ちはだかる……！？
うち拉がれた氷魚は、倒れてしまった。

真実

「これでよし、と」

瑪瑙は、氷魚の手首に巻いた、包帯を結んで言った。

「ありがとう…瑪瑙、あたし」

「ん？」

「なんでもない…話して？」

静かに頷いて、瑪瑙は話し始めた。

「師匠^{せんせい}…お前の母さんは、俺と柘榴の、剣の師匠だった。父親の方の話は分からねえが、とにかく気が強くてな、俺たちは叱られてばっかだったよ」

「あたしに、似てる？」

「似てる、髪の色も、性格もそっくりだ」

「ねえ、今はどこにいるの？会いたいなあ」

「そうか…そう、だよな」ふ…と、瑪瑙は、宙を見あげた。

「え？」

「いや、また明日な…今日は、もう休もうぜ？」

瑪瑙は、そつと氷魚を抱き寄せた。

「瑪瑙…まだ、起きてる？」

もそもぞ、と寝返りを打ち、氷魚は、そつと話しかけた。

「どうした、眠れねえのか？」

「うん、なんか…目が冴えちゃって」

余程、母親に会いたいんだろう、興奮ぎみに言う彼女を、瑪瑙は、悲しませたくはなかった。

「ごめん…」

「どうしたの？瑪瑙？」

「ごめんな、ごめん…」

瑪瑙は、ただ、氷魚を抱き締めることしかできなかった。

真実を知れば、彼女が悲しむのは、目に見えている。
できるなら、なにも、知らせたくはなかった。

「苦しいよ、瑪瑙」

「氷魚…っ」

朝焼けが、地平を赤く染めていく…
夜が、明ける。

「氷魚、ホントに…会いたいのか？」
躊躇いながら、瑪瑙は聞いた。

「うん、どうして？」

「わかった…ついてこい」

「う、うん…」

朝焼けの道を、二人は、さらに村の奥に向かって歩き出した。

「なんか、寂しい所ね、ねえ、瑪瑙」

「ああ…」

「ねえ、どうしたの？」

怪訝そうに、氷魚は首を傾げる。

「ついた、ここだよ」

氷魚は、その光景に、絶句した。

「ここ…お墓」

森の奥深く、下草が刈られ、よく手入れされた、墓地が広がっていた。
た。

「こっちだ、氷魚」

墓石の脇を通って、瑪瑙は進んでいく。

瑪瑙は、氷魚を振り返って、足を止めた。

「ここが、柘榴の墓だよ」

「刀だけの墓？この二つだけ。…ね、まさか、まさか隣の墓って！
？」

「すまない、氷魚…すまないっ」

「お母さん、なの？」

「刀と、片腕しか戻ってこなかったんだ」

「そ…そんな、どうして…どうしてこんなっ！ひどい、ひどいよっ」
「氷魚ッ！」

傾いだ氷魚を、瑪瑙は慌てて抱き留める。

「しっかりしろ、氷魚っ、氷魚っ！？」

瑪瑙は、氷魚を抱えて、必死に村へと走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0879a/>

幻夢抄録 目覚め 7章

2010年10月11日19時33分発行